

パネル討論「アーカイブズとデジタル技術の未来を考える」(1) ～公文書のデジタルアーカイビングをめぐる～

鈴木卓治 (国立歴史民俗博物館)
五島敏芳 (国文学研究資料館)
牟田昌平 (国立公文書館)

情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会において「デジタルアーカイブ」が重要な研究テーマのひとつにとりあげられるようになって久しい。デジタル技術の発達は目覚しく、「ポーンデジタル」な資料(他の媒体上で作られた資料のデジタルコピーでない、最初からデジタルデータとして作られた資料)の急速な台頭や、「Google≒デジタルアーカイブ」という視点の登場など、早くからアーカイブズとデジタル技術の問題に強い関心を寄せていた当研究会としては、この潮流を正確に把握して、デジタルアーカイブ研究をどの方向に発展させていくべきかについて、よく学ぶ必要がある。

われわれは、アーカイブズの専門家を招いて、アーカイブズとデジタル技術にまつわる最新の状況と課題について理解を深めることを目的とする「アーカイブズ小特集」を全2回の予定で開催することとした。本稿は、その第1回として、国立公文書館の牟田昌平氏を招いて実施する、公文書のデジタルアーカイビングの現状と未来を探るパネル討論についての予稿である。

Panel Discussion "How will digital archives develop in the future?" (1) --- In case of government documents ---

SUZUKI, Takuzi (National Museum of Japanese History)
GOTOH, Haruyoshi (National Institute of Japanese Literature)
MUTA, Shohei (National Archive of Japan)

This is a preliminary report of the 1st panel discussion titled "How will digital archives develop in the future?" Studying the current state and the future of digital archiving of various kinds of materials is very interesting and important task for our SIG. Two panel discussions of this problem are planned. Some archivists will be invited as panelists of the discussion. This panel discussion discusses the problem of digital archiving of the government documents. We will know the latest, correct information about relationship between "true archives" and digital technology by the discussion.

1. アーカイブズ小特集「アーカイブズとデジタル技術の未来を考える」について

人文科学とコンピュータシンポジウム(じんもんこんシンポジウム)等で、「デジタルアーカイブ」が重要な研究テーマのひとつにとりあげられるようになって久しい。日本で生まれた言葉とされる「デジタルアーカイブ」[1]は、しかしながら、伝統的なアーカイブズの知見を踏まえて生まれたとは言いがたい[2]。

デジタル技術の発達は目覚しく、「ポーンデジタル」な資料(他の媒体上で作られた資料のデジタルコピーでない、最初からデジタルデータとして作られた資料)の急速な台頭や、「Google≒デジタルアーカイブ」という視点の登場[3]など、早くからアーカイブズとデジタル技術の問題に強い関心を寄せていた当研究会としては、この潮流を正確に把握して、デジタルアーカイブ研究をどの方向に発展させていくべきかについて、よく学ぶ必要があると考える。

当研究会は、上記シンポジウムにおいてしばしばアーカイブズ研究の専門家による招待講演を催すなど、アーカイブズ分野の専門家との交流を図ってきたところであるが、上記の状況に鑑み、今後より密接な協力関係を構築する必要がある。

本企画は、通常研究会の開催枠を利用して、濃密な質疑応答が可能となる「小特集」の開催形式を取り、アーカイブズの専門家を招いて、対象となる範囲を定めて、アーカイブズとデジタル技術にまつわる最新の状況と課題について理解を深めることを目的とする。

2. 第1回パネル討論「公文書のデジタルアーカイビングをめぐる」について

公文書は、国が行なったことの公式の記録として、国民の権利や国の権益を保護するためのより所となる基礎資料であり、われわれの社会を維持するための根幹をなす要素のひとつである。

第1回のパネル討論は、国立公文書館の牟田昌平氏をお招きして、公文書のデジタルアーカイビングに関する議論を行うこととした。

牟田氏は、2001年に開設されたアジア歴史資料センター(通称アジ歴)[4] --- 近現代の日本とアジア近隣諸国などとの関係について、当時の内閣、外務省、陸軍、海軍の公文書等の原本画像を大規模にデータベース化しインターネット上で公開することで歴史事実を共有しようとするデジタルアーカイブ --- を構築したスタッフの一人である。アジ歴は、それまで議論はされていたが実際には存在しなかった“日本初の公文書デジタルアーカイブ”であり、現実の技術水準と利用者からの要求を冷静に分析し、限られた人材・時間・予算の中で、割り切るべきところは割り切る現実的戦略によって、実用に耐え、かつ事前の予想以上に利用者の要求に応えうるデジタルアーカイブシステムを提示することに成功した。アジ歴の成功は、国立公文書館デジタルアーカイブ[5]の開設(2005年)の道を切り開いたといえる。

しかし、公文書のデジタルアーカイビングの未来は決して明るくない。ひとつは制度的な問題、すなわち公文書の管理に対して十分な権限を国立公文書館がもたされていないため、公文書の適切な記録管理が行われていない現実があること。もうひとつは、デジタルデータの長期保存問題に関する日本の取り組みが、欧米に比べ立ち遅れていること[6]である。

パネル討論では、鈴木、五島、および牟田氏による議論を通じて、公文書のデジタルアーカイビングの現在と将来を明快に提示することをめざす。

謝辞

各国のデジタルデータの長期保存に関する取り組みの現状について、(社)日本画像情報マネジメント協会の長谷川英重氏より詳細な資料[6]をご提供いただいた。記して謝意を表します。長谷川氏には本パネル討論のパネラーを委嘱したが、あいにくPDFの国際規格化に関する会議の日本代表としてご出席のため日程が合わず断念した。ぜひ直接お話を伺う機会を設けたい。

参考文献

[1] 影山幸一：デジタルアーカイブという言葉を生んだ「月尾嘉男」、ミュージアム IT 情報, artscape, 大日本印刷(株)の Web サイト, http://www.dnp.co.jp/artscape/artreport/it/k_0401.html.

[2] 鈴木卓治：デジタルアーカイブとは何か、特集「デジタルアーカイブにおける色彩」、日本色彩学会誌, Vol.31, No.4, pp.280-285(2007-12).

[3] 特集「アーカイブズ」、季刊大林, No.50(2007), 大林組。

[4] 特集「デジタル・アーカイブによる歴史事実の共有ーアジア歴史資料センター5年の回顧と展望ー」、アーカイブズ, 第27号(2007-3), 国立公文書館。

(<http://www.archives.go.jp/about/publication/archives/027.html>にて閲覧可能.)

[5] 特集：国立公文書館デジタルアーカイブ, アーカイブズ, 第21号(2005-9), 国立公文書館。

(<http://www.archives.go.jp/about/publication/archives/021.html>にて閲覧可能.)

[6] 長谷川英重：イメージデータ長期保存のISO動向, 2006-12-22, PowerPointスライド(本人より提供)。